

---

第 26 章 ～番外編～ 沙漠の一大経由地アウレフ

**往年の女性パイロット**

何世紀もの間、アウレフと外界をつなぐ手段はキャラバンしかなかった。フランスはサハラを征服した後（訳注：1900 年初頭）、アフリカ大陸におけるアウレフの地理的位置づけを考慮し、ここに国際空港を開設した。この空港はアルジェリアの独立まで維持された。ヨーロッパ諸国の多くはサハラ以南に植民地を持っていたが、これらの宗主国からサハラ以南の植民地へ向かう飛行機は皆、アウレフの飛行場で給油を行った。

1952 年の、その出来事を私は今でも鮮明に覚えている。私たちの学校を独りの老婦人が訪れた。（訳注：当時著者は 15 歳。）背中の曲がった小柄なおばあさんで、杖を突いて歩いていたが、とても精力にあふれた人物だった。私は今でも彼女に会ったのが、つい昨日のような気がする。私たちの教室で、彼女は教壇に登ると、生徒を前に、手や、時には足まで使って派手なジェスチャーを交えながら、大きな声で話した。私たち生徒は、呆気にとられて、口をあんぐり開けたまま彼女の演説に聞き入った。彼女は人を引き付ける何かを持っていた。彼女がアウレフを去ってからも、子供たちは彼女の囁れ声や、話し方、ジェスチャーを真似して遊んだものである。彼女は私たちの教室で半時間ほど話をした。内容は、自分のパイロットとしての人生についてだった。彼女が空を飛んでいた当時は、飛行機はまだ無線を積んでおらず、目的地へ向かうにも、今のように直線距離を飛ばばいいというものではなかった。何百年もの間にキャラバンが地面に刻んだ隊商路の跡などを、目で追って飛行しなければならなかったからだ。従って、当然飛行機は、あまり高度を上げて飛ぶことは出来なかった。彼女が飛行機に乗るようになったのは 1909 年のことだと言う。私たちは思ったものである。ヨーロッパでは、この人のように、女性でも教育を受けてパイロットになることが出来るというのに、この地に居る私たちはなんと後進的なことか。女性は言うに及ばず、男性でも大部分は未だ文盲のままではないか。

彼女は熱狂的な演説を次のように締めくくった。

「さあ、フランスが世界の指導的国家となるように、ともに働こうではありませんか。“自由・平等・友愛！” 志を高く持ち、手に手を携えて、この地球上に幸福を勝ち取るのです！」

そして、この熱烈な愛国者は、しわがれてはいたが、腹の底から絞り出すような大声で、私たちに言った。

「さあ、起立しなさい、子供たちよ！」

私たち生徒は、言われた通りに立ち上がった。教室の後ろにいるユーゴ夫妻はどうしているかと、ちらっと後ろを振り返ると、彼らも同じように起立してい

た。

「右手を、こういう風に真っ直ぐ上げなさい。そう、少し前に倒し気味に。」と彼女は命じた。私たちは言われて通りに従った。

「ラ・マルセイエーズ（フランス国歌）斉唱！」

老愛国者の大音声が教室に響き渡った。しかし、彼女と一緒に歌えたのはユーゴ夫妻だけだった。

着席しなさい、と私たちは言われて再び席についたが、老愛国者はユーゴ夫妻に詰め寄った。

「なぜ、この子たちは国歌を歌えないの？彼らは、フランス人ではないんですか？！あなた方の第一の使命は、祖国に貢献することでしょう。」

ユーゴ校長は、しばし沈黙した後、聞こえるか聞こえないかの声で言った。

「この子たちに何をしろと言うんですか。彼らはまだフランス語を学び始めたばかりなんです。しかも、この教室の外でフランス語使うことはないんです。

この辺りの事情については、後で教室の外でお話ししましょう。」

ユーゴ校長は、生徒の前での口論は避けたいようだった。教師として、みっともないところを生徒に見せまいとするのは、もったもな話である。

老パイロットは、この日私たちに、こう言って帰って行った。

「みなさん、さようなら。よく勉強しなさい。フランス万歳！」

## 沙漠踏査のキャタピラ車と石器時代の鍬（やじり）

アウレフに最初の飛行機が着陸したのは、車がやって来る 10 年も前のことだった。1920 年頃、三台の車がアウレフを通りかかった。沙漠踏査のための編隊の車両で、砂礫の上や、砂丘の走行に耐えられるよう、戦車のようなキャタピラの着いた特別仕様の車だった。この編隊は、トゥグルト（Touggourt）（アルジェ南方 600 キロ）からトンプクトゥ（マリ中部）まで、サハラは何千キロもの道のりを踏破した。この冒険は、今日で言えば月面着陸にも匹敵するだろう。この三台のうちの一機は、エクサンプロバンスからそう遠くないところにある博物館に展示されており、私は 1975 年にそれを見る機会があった。生憎写真を撮る方に夢中で、このサハラ踏査が何時行われたかは見落としてしまった。この車両は、雰囲気を出すために、下に砂を敷いたところに展示されていた。その横には、石器時代の鍬なども展示されており、「アウレフで採取された鍬」と説明が添えてあった。傍らで博物館の案内係が見学者に説明していた。

「アウレフは、こうした古代の武器生産の一大中心地でした。」

私は、この係員に話しかけ、自分はそのアウレフの出身で、地元から出た遺物を、こんな立派な博物館で見ることができるとは、実に光栄です、と言った。

「なんと、そこいらしたとは。これらの展示品について、もっと詳しいこ

とを話してくれませんか。」と、係員は私に尋ねた。

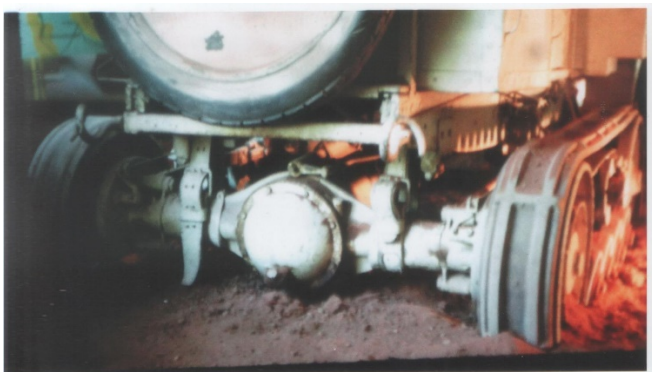
私は、この分野の専門家ではないが、と前置きしてから、次のようなことを話した。

それらの鍬や石器の一部は、おそらく、1950 年から 1953 年にかけて、当時まだ小学校の生徒だった私たちが、ユーゴ校長と一緒に毎週木曜日の課外活動で拾い集めたものだと思われること。ユーゴ先生は、私たち生徒に、化石木やクロコダイルの頭の化石の破片を見せながら、サハラの前生代の動物相や植物相について講義してくれたこと。そのクロコダイルなどの動物の骨の化石は、フォガラのはじ作業の跡、堅井戸の周りに捨てられた泥の中から見つかったので、地下 20 メートルあたりの地層に埋まっていたと推定されること、等々である。

ユーゴ先生の話によると、このフォガラの泥の中から見つかった骨片にいたく興味を引かれた研究者がいたという。彼は、この骨を研究室に持ち帰って分析し、前生代の化石であることを確認した。一年後、調査団が派遣されてきた。駐留軍の隊長も協力し、何人かの地元の案内人を調査団に付けた。彼らはフォガラの底へ降りて行き、相当な数の化石骨を収集するのに成功した。これは 1948 年ごろのことである。ここで見つかったのと同種の動物の化石は、現在までのところ、アルジェリアの他ではチュニジアとニジェールでしか見つかっていない。ユーゴ先生は、私たち生徒に言ったものである。

「人間が現れるずっと前、ここは沼地でワニたちが住んでいたんだ。それらの化石が 20 メートルも地下から見つかったってことは、大昔はそこが地表だったんだよ。信じられるかい？」





### アウレフ空港の発展

その後、アウレフと外界をつなぐ交通手段は、陸上も空路もそれぞれに発達して行った。私の母方の伯父モハメッド・ハムダ (Mohammed Hamouda) は、アウレフの空港で給油係として働いていたが、初期の飛行機は三人しか乗れなかったそうだ。各人は、縦に並んだ狭い仕切りの中に、さやの中のエンドウ豆よろしく座り、頭は外に出ていて、吹きさらしの状態だったので、パイロット以外もヘルメットを装着しなけりばならなかつた。最前列のパイロットの席は、エンジンの真後ろだつた。飛行機が着地し、パイロットが降りてくると、その姿は油で汚れて真っ黒だつた。パイロットは水をもらつて、顔や手だけを洗い、給油が終わるとまたすぐ飛びだつて行つたという。伯父さんは、パイロットの顔は煤で真っ黒で、防風メガネの下の目しか区別がつかなかつたと言つていた。この小さな三人乗りの飛行機は、ヨーロッパと、北アフリカや AOF (フランス領西アフリカ) の間を結び郵便を運んでいたが、燃料タンクも小さかつたので、あまり長い距離を続けて飛べず、500～600 キロごとに給油しなければならなかつた。速度も時速 180～200 キロくらいだつた。アウレフは北アフリカとサハラ以南の国々の中間に位置する、交通の要衝だつた。1930 年代、飛行機の性能が向上するに従つて、搭乗できる人数も増えて行き、アウレフを経由してアフリカ大陸北部と南部を結ぶ便の数も多くなつていった。エールフランスは、アウレフに乗り継ぎ客専用のホテルを建設した。一部の乗客は一夜をここで明かさなければならなかつたからである。アウレフの空港はかなりの盛況で、ランジット用ホテルで働いていた私の叔母のアイーシャも、時には空港まで乗客の食事を運ぶこともあつたそうである。また、叔母さんが私に、今日 24 時間で空港を発着した飛行機は 35 以上にもなつたよ、と言つたこともあつた。

アウレフの空港を離発着した飛行機の中では、3 件の事故があつた。一件目は、アウレフからマリのキダル地方 (Kidal) のゲルホーク (Guelhouk) へ向かつた飛行機で、着陸の数分前に山に衝突した。1942 年 1 月 12 日の午前 11 時頃のことだつた。この便には、アウレフの住民の中で、初めて勇を鼓して飛行機に

乗ったモハメッド・ベン・バフス・ベンガルルーアという人物が乗っていた。彼は商売熱心な商人で、トゥアレグ族から家畜を買入れ来てアウレフで売り、反対にアウレフのデーツをトゥアレグへ売るといふ仕事をしていた。この事故の後も、沢山のアウレフの住民が飛行機に乗って旅立った。特に、サハラ南部の国々へ行く場合、何の苦労もなく一気にタネズルフトの大沙漠を渡れるこの交通手段は魅力的だった。最初の事故から 7 年後、今度はサアド・カウイア (Saâd Kaouia) という人がアウレフから南部諸国へ行く便に乗り、同じように災禍に見舞われた。この二度目の事故からしばらくの間は、アウレフから飛行機に乗る人はなかった。正確な日時は覚えていないが、1940 年代の終わりか 1950 年代初め、今度はアウレフから南方へ向かった貨物便が墜落、横転して大破した。この飛行機は貨物を満載していたので、食料品や缶詰が数百メートルに渡ってばらまかれたと言う。この機体には三人の乗員が乗っていた。

アウレフはサハラを中心都市で、住んでいるフランス人の数もここが一番多かった。アルジェリア南部で最も大きい気象観測所や、民間空港、軍の空港などで働く技師やエンジニアが沢山いたからである。外の世界の情報は、これらの人々を通じて地元にもたらされた。この地方で唯一の発電所もあり、ラジオ局、空港、郡の役所などに電力を供給していた。郡の行政官は駐留軍の隊長が兼任していた。フランス軍の兵士は皆、ボルジ (城塞) の中央部に住んでおり、村の一般住民からすると夢のような快適な生活を送っていた。フランス人の人口は、民間人と軍人両方合わせて 60～100 人ほどだった。フランス人のコミュニティには、各種スポーツの競技場も完備していた。学校の生徒達もそれらを使うことが出来た。サッカー・テニス・バレーボールの競技場の他、走り幅跳び・高跳びの練習場、それに自転車競技や馬術競技のための楕円形のトラックもあった。馬は 2～3 頭くらいいた。フランス人たちは、この沙漠の真ん中で、ヨーロッパ世界から切り離された無聊を慰めるため、こうした余暇活動に非常に熱心だった。

1955 年モロッコでは、スルタンのモハンマド五世 (Mohammed) がフランスの謀略によって退位させられ、代わって従兄弟のムーレイ・アラファト (Moulay Arafat) が即位するという事件が起きた。元国王一家を乗せた飛行機は、国王の追放先であるマダガスカルへ向かう際、アウレフに給油のため着地した。伯父のモハメッド・ハムダは、作業のため機内へ入り、元国王の姿を見たという。元国王は飛行機から降りては行かず、伯父に、ここはどこかと訊いた。伯父が、アウレフです、と答えると、元国王は、聞いたことない場所だな、とつぶやいたという。飛行機が再度離陸した後になって、空港の偉い人が伯父に、あれがモロッコのスルタンだと教えてくれたそうだ。他にも二名の有名人が 1940 年代に、給油のためにアウレフの空港に降りている。ドゴール将軍とル

クレール将軍（訳注：ノルマンディー上陸作戦の時の英雄の一人。1947 年アウレフの近くコロン・ベシヤールで飛行機事故により死亡。）である。

訳注：

フランスの植民地になるまで、アルジェリアは、だいぶ形骸化してはいたがモロッコのアラウィ朝の一部だった。モハンマド五世は、フランスから独立する政策をとったため、同国を保護領にしていたフランスによって、1953 年に退位させられる。初めコルシカ島に追放され、次いでマダガスカルへ移された。アウレフを通りかかったのは、コルシカからマダガスカルへ移される時か、あるいは、フランス側と独立に関する和解が成立し、1955 年に復位してモロッコへ戻る時のどちらかだろう。モロッコは同スルタンの復位後、1956 年に独立した。